



臺灣俚諺に現れた人の一生

陳紹馨

人間の生活は種々の方面から観察することができる。生物学者には生物学的な人間像があり、人類学者、社会学者、哲學者もそれらの立場から人間の観察をする。これら科学的または哲學的な人間観に對して常民の生活の姿を、その生活の波瀾の間に結晶し世代より世代に傳承される俚諺を通して見ることも興味深いことであらう。此處で臺灣の俚諺に現された人の一生によつて常民の生活史を辿りたいと思ふ。

爬へば立て、立てば歩めは古今を通じて變らない親心である。いたいけな赤子が何時から片音を口にし何時からあんよがお上手になるか、この子の行末はどうであらうかは親の關心事であり、それが

俚諺に現れてゐる。

○七坐、八爬、九弄牙（赤ちゃんは生れて七ヶ月で坐り、八ヶ月で爬び出し、九ヶ月で歯が生える）

無論統計的に調査した譯でなく、長年の経験によつて體得した庶民の實踐知識であるが、現代の科學的な調査に照して大體當らざると謎からはずの様である。

○會行行歲一、物行行歲七（早いものは一年と一ヶ月で歩行し、遅いものは一年と七ヶ月で歩行する）

つまり歩行は早いものは十三ヶ月目に

に、遅いものは十九ヶ月目に始まるといふのである。歩行に關聯して面白い俗諺がある。歩行よりも先に口のきける子供は「好命人」であり、歩行が出來て後に口がきけるのはさうでないといふのであらう。

る。つまり歩く前に口のきける子は大きくなつてからも足で走り廻る要なく口で人に命令するものになるから運勢がよいといふのである。

○三歲飛、四歲尚、五歲上采（又は五歲掠去削）（三つの時が一番可愛く、四つになればそろへきかなくなり、五つになれば手がつけられない、又は五つ

の子は悪いから殺してしまへ）

これは年齢による子供の性格の變化を眞表したものである。児童の生長と共に自我意識が強くなり、我を通さうとしてきかなくなることは日常觀察される處であり、「七つ八つの憎まれ盛り」といふのも同じ現象を指すものに他ならない。昔から泣く子と地頭には勝てないことになつており、子供の我儘は宿命的な事實であるが、それが四五歳頃から昂じて来るものであらう。

○三歲知大、七歲到老（三歳になればその子が大人についた時の性質迄見ることが出来る、七歳になればその子の一生のは「好命人」であり、歩行が出來て後に見透がつく）

謂である。

子供は人生の無風帶である。せい／＼

愛嬌をふりまはして親を喜ばせ、腕白をして親を手こすらせるまで、親の懷に育まれてすぐ／＼のびて行く。そして少年期になるとそろ／＼浮世の風が當る。

○枯木逢春猶再發、人無兩度少年時（枯木は春に逢へば猶再び芽を吹きますが、人間には二度と少年の時がない）それであるから若い時にうんと人生を享樂せよ、といふ風にも話がもつて行けるが、併し、

○少時不努力、老大徒悲傷（若い時に刻苦努力しなければ年とつてから徒に悲むばかり）

といふのが本筋の意味である。

七つ八つの腕白ざかりから親や師匠がやかましいことを訓つて勉強させるもの、子供がそろ／＼自分でものを考へ、又自分のことを考へる様になるのは十五頃からである。

○十五而志、三十而立（十五で志を立て、三十で一本立ちになる）

十五になれば自ら志を立てることが出来、又立てなければならない。「十五過ぎて子の意見」子供への意見は十五過ぎてから、といふのも理あることである。

早熟な亞熱帶人は二十前後になれば身體はひとわたり成熟する。尤も、

○杏葉大到大壯、杏脯大到廿五（女はお

中がふくれるまで大きくなり、男は廿五まで大きくなる）

とも謂ふが、二十前後で生長が成長の域に達し、生物學上の法則に従つて超個體的生長、即ち生殖の現象が強く前面に現れて來るのである。此處に人生の最も華やかな時期が展開される。

○十八廿二、青春少年時（十八から二十二の頃が青春少年の時）

「十九や二十は色ざかり」の謂である。

青春少年の時に往々春情の興るまゝにおもむくものがあり、色慾を大いに戒めなければならぬ。

○淫、不過三十（淫すれば三十をこえない）

○貪花、不滿三十歳（色を過ごすものは三十に満たないで命を失ふ）

青春期は又人生の危險期と謂はなけれ

ならない。

青春少年の熱にうちされてゐるのみで併し人生の正事がすむものではない。刻

苦奮闘の少年期、花紅柳綠の青春期を経て人間三十になればひとわたり世間の義理人情を辨へる様になる。

○三十往後、締知天高地厚（世間がわかるのは三十から）

世間がわかれば従つて人間もしつかりして來、所謂三十の尻括りといふことになる譯である。それと共に、

○三十而立（三十で一本立ちになる）

三十から四十迄の間が人生の最高潮時である。三十は男の花、四十の分別盛り、最も油ののつた活動期である。而して後に出てる「三十不景、四十不富、五十將尋死路」から見て、三十代は名を追ひ、四十代は利を求める傾向があると謂ふことが出來やう。

昨今「人生は四十から」といふことが提唱されてゐるが、俗衆の間においては、四十の聲を聞けば人生はもはや下り坂である。精神の方では「四十男の分別盛り」であつても、體力の方では「四十腕」、「四

十倍り」、「四十がつくり」と謂つて四十

哉頃から腕力視力衰へ、體力が衰へるの
を如何ともしがたい。臺灣では、

○上冊就労婦（四十になればもうおしま
ひだ）

といふ「四十四十と人いふけれど三十
九ぢやもの、花ぢやもの」といふ心情も
察せられるのである。

○人過四十、天過半（人生四十を過ぐれ
ば太陽が正午を過ぎた様なもの）

○月到十五光明少、人到中年萬事休（月
が十五夜になれば光はだん／＼すれ
て行き、人は中年に到れば萬事休すで
ある）

「五十臘」「五十肩」と俗語に謂ふが、
人生五十になれば季節の變り目などに手
腕骨節がいたんで所謂長命病を見舞はれ
る。晉開活躍の時代は既に過ぎ、三十四
十代にしつかり働いて身を立て産をなさ
なければもはや取りかへしがつかない。
○三十不榮、四十不富、五十將死路、
（三十にして人に懽れず、四十にして富
まなければ、五十になつて死路に向ふ

のみ、或ひは五十になつて子供の助け
るを得つばかり）

昔の人にとって子供を育てるのは父親の
代りをさせる爲（嗣後生昔老父、嗣娘婦
替大家）であり、孫はおかに祖父祖母に
結びつけられてゐる。各個人は何處迄も
前後の世代に結びつけられ、人の一生と
いふものは一家族の世代の流れの一筋で
あつて決して一個人の一生ではない。子
供が結婚すると別の家に分れて住み、老
夫婦のみがひとつ家に満しく暮すといふ

近代大都市文明の現象は、昔の人には思
ひもよらない處であつた。男女共に結婚
し子供を生んで連鎖たる家の流れを繋ぐ
のが神聖な義務で（男大當婚、女大當嫁）
子がないのは「家」に對する反対である
(不孝有三、無後爲大)。又一生の働き盛
りを親及び子の爲に働いて來たものにと
つて老後子孫の幸福を享けるのは當然
十三八十四になれば閑遊樂がお迎へを
出さなくとも自分で出向いて行く。
九十百送庄きぬくのはよほどのことで
あり、人生も此處らあたりで暮としよう。
(筆者は臺北帝大土俗人種學教室員)

子がなければ一生苦勞する)

○六十無孫、老來無根（六十にして孫が
なれば木に根がない様に老後の頼り
になるものがない）

人生も六十になればひときである。

○人生七十古來希
で、七十以後はもうけものと見てよか
らう。希しい老人を珍重し尊敬すべきは
聖人の教を待つまでもない。

○七十不打、八十不罵（七十の老人は之
を打つべきでなく、八十の老人は之を
しかるべきでない）

七十になれば心の欲する所に従つても
規を越えないといふのが聖人の教へで、
七十になつて間違ひをおこすことは萬々
ない筈であるが、たゞひあつたとしても
敬老の立前からして之を問ふべきもので
ない。

○七十三、八十四、四五不叫自己去（七
十三八十四になれば閑遊樂がお迎へを
出さなくとも自分で出向いて行く）。
九十九百送庄きぬくのはよほどのことで
あり、人生も此處らあたりで暮としよう。
(筆者は臺北帝大土俗人種學教室員)